南　薫造

― 強い意志 ―

南　薫造画伯

南　薫造画伯の生家。今は、歴史民俗資料館として利用されています。

みなさん、上の写真の人を知っていますか。この人は、安浦町出身の南薫造画伯です。

薫造は、明治十六年（一八八三年）、医師、南啓造の長男として内海に生まれました。中学時代に初めて油絵と出あい、その感激から次第に絵に対する関心を深めていきました。

両親は、薫造が医者になることを望みましたが、薫造はどうしても絵の道をあきらめることができず、コツコツと努力を続けました。

中学校時代の校長先生も、薫造の努力と才能を認めて父親の説得に協力し、ついに美術学校への入学が実現したのです。

東京美術学校（現東京芸術大学）に入った薫造は、授業はもちろんのこと、教授の自宅へもたびたび訪れて指導を受けました。熱心な態度と素直さに教授も大きな期待を寄せたといいます。

大学卒業後、絵画についてさらにもっと多くの勉強をしたいと思った薫造は、ヨーロッパへ行くことを決意しました。当時としては

とても大変なことでした。

はじめの二年間をイギリスの大学で学び、残りの一年間をフランス・イタリアで絵画の研究を続けました。

その甲斐あって帰国後、「坐せる女」で画家としてデビューすることになったのです。

その後、安浦町の宗像カツと結婚した薫造は、東京に住み、多くの優秀な作品を残しています。

こうした業績により、文部省美術展覧会や帝国美術院美術展覧会の審査員にも選ばれ、東京美術学校教授も勤めました。

戦時中は、空襲から守るために作品の多くを安浦町へ送り、自身も家族とともに安浦町へ疎開しましたが、東京に残した大作は、火災で焼失してしまいました。

しかし、薫造は、その後も、安浦町で身近な人や穏やかな瀬戸内の景色を毎日のように描き続け、昭和二十五年（一九五〇年）、六十七歳で永眠するまで、制作に対する強い熱意を失いませんでした。

偉大な画家南薫造を誇りに思った町民によって、現在は、生家が「歴史民俗資料館（南薫造記念館）」になっており、作品を常設展示して、多くの人に親しまれています。

「坐せる女」（広島県立美術館蔵）